

第2回 日中戦争史研究会議事録

出席者：

川村範行(中日新聞社) 菊池一隆(愛知学院大学) 丸田孝志(広島大学) 堀井弘一郎(都立国際高校) 馬場毅(愛知大学) 森久男(愛知大学) 暁敏(愛知大学) 大野太幹(愛知大学) 平野孝治(愛知大学 ICCS) 水野光朗(愛知大学) 広中一成(愛知大学大学院研究生) 野口武(愛知大学博士後期課程) 湯原健一(愛知大学博士後期課程) 王敬翔(愛知大学大学院博士後期課程) 大野絢也(愛知学院大学大学院博士前期過程) 村上享二(愛知大学大学院博士前期課程) 黒川由希(愛知大学大学院博士前期課程) 山田拓郎(愛知大学大学院博士前期課程) 千賀新三郎(一般) ほかに市川氏(一般)

以上20名(順不同、敬称略)。

1、大野太幹報告「張作霖・張学良政権の対ソ観と辺境植民政策」(司会：馬場毅)

[報告内容]

1920年代を中心として、張作霖、張学良政権期の開墾、植民のための難民受け入れ状況を通じて、対ソ観の変遷、辺境防衛意識の相違を比較し、分析を行った。まず、前史として、辺境を移民により開発し、防衛する「移民実辺政策」について述べ、山東からの移民を、吉林墾植分会(吉林都督合意)を受け手としての移民政策を分析し、次いで張作霖政権期のカラハン宣言以降の中ソ間の問題点を確認し、張作霖がソ連に対して、反ソ意識(馮玉祥支援や赤化宣伝活動への不信感)を持っていたが辺境防衛に向かわず、奉天省への直魯難民の受け入れにも消極的であったが、一方吉林省は直魯難民の受け入れに積極的であったことが述べられた。張学良政権になると、辺境防衛意識が高まり、洮隴七県への河南難民の入植計画が実施されたことを明らかにし、まとめとして、張作霖・張学良政権ともに反ソ反共で一致していたものの、張作霖が関内進出を重視したのに対し、張学良は対ソ辺境防衛を重視したと指摘した。しかし、辺境植民、開発の過程は困難さを示しており、結局満州事変で頓挫したとした。→詳細は添付レジュメ参照。

[質疑応答]

Q 森：直魯難民は1927年6月ごろから28年6月ごろまで中断しつつも継続したと考えるが、直魯難民は定着したのか？(自己の研究と対比して)モンゴル(内蒙古)地区には定着しなかったのではないかと。

A：定着しなかったと考える。その以前については詳細が不明である。難民が流入しないから漢族が居ないわけではない。日本移民(開拓団)はホロンバイル周辺の鉱山開発などを目当てに漢族を追い出す形で進入している。

Q 丸田：張作霖政権の難民受け入れの過程において、辺境防衛に関する記述がない。この点の必要性、重要性はなかったと考えるのか？日本、奉天、ソ連の対立を経て、張学良政権期に戦略的意識が高まったと捉えることはできないか？

A：直魯難民を受け入れていた時期は、ソ連が進出してくるという意識がない。日本が土地を(半ば強引に)買収してゆくなかで、在地地主の反発が生じるなど、張作霖・張学良時代では在地有力者の意識も変化している。

Q 菊池①：朝鮮人問題について。移民問題の中で、漢族が日本人に売らなかった土地を朝鮮人には売るが、その後日本人が朝鮮人から土地を買う例がある。引用した史料上、そうした民族問題が見えてこない。

A：吉林農会長の報告(史料)には漢族農民が水稻耕作を覚え朝鮮人にも対抗しようとしていた姿が窺える。ただし、民族問題に連なる史料は収集に限界がある。

Q②：地方省政府(張作霖・学良政権)と南京国民政府に関する記述がない。

A：指摘どおりである。張学良と蒋介石に関する研究は数多あるためその点を略した。ただし、蒋介石と中東鉄道に関する問題など、ソ連側の史料と対比させて史料を読み解く必要があり、いまだ不明な点が多い。ソ連側の史料収集にも限界がある(移動、言語などの点)。

Q③：「移民」の「成功」とは、何をもち「成功」と言うのか(表現方法について)？

A：「成功」という表現には語弊がある。また移民が何をもち「定着」したのかという意味も不明瞭である(課題)。視点は漢族からの視点である。

Q 堀井：張作霖の直魯難民受け入れの「難民救済辦法」に関して(レジュメ2枚目左下②の部分、菊池先生の質問

に関連して)、省政府と国民政府の力関係がいか様であったのか？

A _____ : 清末期より比較的独立性の高い東三省(吉林、奉天、黒竜江)のうち、奉天と黒竜江は連動し、吉林は独自性が高い(立法などを例に)。張作霖が馬賊であったこともあろうが、東北政務委員会も人的な関係性から法的な関係性へと発展してゆく。組織化していったのは張学良政権期のころで、張作霖の部下(子分)で政策上反対した人材は政権から離反している。

Q 広中 _____ : 政権の防衛構想について。当時のロシアの軍事情勢や日本人顧問などの存在は辺境防衛には影響しなかったのか？

A _____ : ロシア側の文献を除けば、日中とも、この当時のロシアの軍事情勢に関する研究が少ない。中東鉄道の研究などにより帝政ロシア期にウラジオストークに重点が置かれたことは明らかであるし、軍事衝突も起きている。軍隊が置かれてはいたものの実態が明らかになっているとは言い難い。

Q 暁 _____ : 「青年党」について。ホロンバイルにある。27年に蜂起した後、外蒙古へ逃亡し、29年にハイラル自治政府を打ち立てた。辺境防衛の意識を高めた契機であろう(報告上、モンゴル側の情勢が未整理であると発言した点についてコメント、推察)。

Q 水野 _____ : 引用した地図について。何を引用した地図か？日本が作成した地図と見受けるが、中国側の地図を使用しないのはなぜか？

A _____ : 『満洲商工概覧』(満鉄興業部商工課、1928.10)であり、日本陸軍部測量部が作成したものである。この当時、張作霖や張学良らに正確な地図が無く、日本軍の作成した地図を使用していた(史料として中国側の地図が希少である)。戦時に張作霖が戦略上から意図的に作成しなかったことも考えられる。

Q 森・菊池ほか _____ : 移民と難民の区別について。どのように使い分けるのか？

A _____ : 先行研究上でも使い分けが困難である。流動人口の見分けは困難である。たとえば、華北流入者によく見られる「出稼ぎ」は数年内で一定以上稼ぐと郷里に帰ってしまう。「難民」については、ある程度財産を持って流入する人も居れば、まったく財産を持たず流入する人も居り、「定着」するかどうかの見分けは一概には言えない。

Q 馬場 _____ : 難民受け入れについてであるが、27年に山東省で大刀会が暴動を起こした際に共産党も参加しており、奉天派の張宗昌統治(山東)に反対して大刀会を指導しようとしている。28年の東北の大刀会の暴動は、苛捐雑税を加えられていた山東出身者が多く参加しており、張作霖が山東からの難民を制御しようとするのは(統治者として)当然であったように考えられる(報告よりコメント)。

2、広中一成報告「中華民国臨時政府の成立と特務部」(司会：馬場毅)

[報告内容]

中華民国臨時政府の首班選出の過程を通じて、北支那方面軍特務部の華北経済開発構想と浙江財閥の関係について考察した。まず、1930年代に浙江財閥が華北金融界に勢力拡大したが、参謀本部から支那課長として派遣されてきた喜多誠一郎が反感を持ち、蒋介石らとの会談を経て華北経済開発に浙江財閥の資金を利用する構想が存在したことを明らかにした。日中戦争が起こり、陸軍内で浙江財閥に対し反発が強まると、喜多は華北経済から浙江財閥を分離させる計画を立てた。また華北新政権樹立に向けて人材を見立て、中でも北洋政権期に財政総長を務め、浙江財閥とも関係の深かった王克敏と結び、華北現地資本を取り込むことを狙って王克敏を中華民国臨時政府の首班として喜多らを選定したことを明らかにした。→詳細は添付レジュメ参照。

[質疑応答]

Q 森 _____ : 喜多は、呉佩孚や唐紹儀らの名だたる人物(一流)を担げなかったから、王克敏(二流)を担いだのではないか？また、戦争を始めたために利用できる人物を利用したのではないか？

A : 先行研究では「王克敏が一流ではなかったから」という評価像になっているが、喜多の判断(史料上から)は「一流二流」という判断ではない。また軍内の意思表示ではなく、喜多自身が考案したとの判断する。

Q 丸田 : 王克敏の主体性がどこにあるのか? 喜多らがやむをえない中で王克敏を選択したのではないのか? 史料上の表記からは優先順位があるのか、または無いのか? 王克敏側の史料で捕捉できないのか? (レジュメ5頁、史料12)

A : 表記の順位については不明である。王克敏側の動向は曹汝霖の回顧録に現れるが「日中和平のため」であったということが記述されている。具体は(史料上)不明である。喜多らとの認識に「ズレ」があったかも不明である。

Q 森(上記質問に関連して) : 喜多の対中認識は磯谷廉介に似ている。喜多に関する評伝は無いのか?

A : 指摘どおりである。評伝は現段階で見つかっていない。個人に迫るには「支那通」各人を掘り起こさねばわからない。喜多は武力ではなく謀略に抛ろうとしたため、板垣らに比較すると穏健である。

Q 菊池 : 先行研究に関して浙江財閥の認識が不明確である。史料上、喜多の認識も浙江財閥の認識が不明確であるために史料に引きずられているのではないのか? また史料上、中国側の動向が見えてこないが、経済提携は日本の進出を阻止するためなどの体裁上のものであったのではないのか? ある程度背景整理として先に記述必要があろう。北洋軍閥系の人脈、浙江財閥と王克敏の関連性・実証性、そのほか貨幣制の問題が関連するであろう。王克敏に関して略歴が必要であろう。

A : 指摘どおりである。王克敏と浙江財閥の関連性については幾ばくかの論考がある。

Q 堀井 : 以前、新民会について政治的な分析を行ったことがあるが、本報告により側面を理解することができた。王克敏は比較的反日的言動が多かったと認識しているが、やはり、なぜ王克敏が利用されたのかは焦点となろう。北支那開発会社や政権中枢との政治的対立、確執(カイヤイ性に対する反発)はあったであろうし、汪精衛との関連性も指摘すべきであろう。

Q 馬場(上記、菊池、堀井質疑に関連して)

: 王克敏と浙江財閥と関連して、王は日本への「協力」の形態をとりながら、「抵抗」の意図があったのかどうか。単に平和工作に動いた人物と評価してよいのかどうか。「協力」の形態をとりながら、「抵抗」への意志を秘めているなら、従来の評価の見直しの対象になる。

A : 王克敏は中国銀行総裁となるなど、浙江系の中心銀行の要職を歴任している。また宋子文や孔祥熙などとも関連し、ある程度国民政府の組織として動く点も指摘できる。こうした点が認識になっていったのではないかと考える。

以上。
(文責 野口武)